

居酒屋

ぼったくり

秋川滝美

Takimi Akikawa

7

目次

病の防ぎ方……………

297

ぼったくり危機一髪……………

217

笑顔にできなかった客……………

157

大人だからこそ……………

65

紫煙の漂う先……………

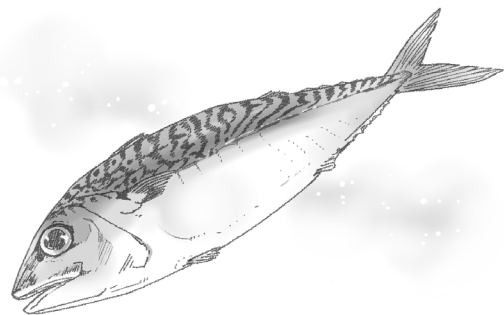
5

紫煙の漂う先

しめ鯖

鯖のオランダ煮

豆腐とナメコの赤だし味噌汁



空は晴れ上がり、ところどころに小さな雲が浮かんでいる。秋の深まりをそのまま示しているような濃い青の下、東京下町の商店街で居酒屋『ぼったくり』を営む美音は、魚屋を目指してせつせと歩いていった。
しばらくして、馴染みの魚屋、『魚辰』に辿り着くと、ガラスケースを覗き込んで目尻を下げる。

——うわあ……今日の鯖、すごくいいわ……

秋はいろいろなものが美味しくなる季節であるが、九月から十月、冬に向けて脂を蓄え始める鯖も例外ではない。

巷では庶民の味だと言われがちで、高級料理店でお目にかかることは少ないよ

うだが、鯖は居酒屋にとってなくてはならない食材である。

元々、美音は秋刀魚や鰯といった青魚を好むが、とりわけ鯖はお気に入り。秋になるとうきうきしながら『本日のおすすめ』に鯖という文字を書き連ねる。

品書きに鯖を使った料理を見つけて、「おっ？」なんて嬉しそうな顔をする客を見るのは、美音の秋の楽しみのひとつだった。

「ミチヤさん！」

美音は、鯖の鮮やかな縞模様と澄んだ目を確かめ、元氣いっぱい声かける。ミチヤはそんな美音を、片手を上げて制した。

「おう、わかつてる、皆まで言うな。今日の鯖は、

飛びきり新鮮で脂もたっぷり、文句なしの一押しだ。でかいとこ持っていきな！」
ミチヤはいかにも魚屋らしい威勢のいい言葉を返してくる。

いつもならば、店で使う魚は前日のうちに注文し、ミチヤの都合のいい時間にまとめて配達してもらうことになっている。だが、鯖^{さば}だけは別だった。

これぞという鯖を見つけたとき、美音は配達を待たずに自分で持つて帰る。一刻も早く処理をしたいからだ。鯖が旬を迎え脂^{あぶら}がのりきるこの時期、朝一番に『魚辰』を覗くのもそのためである。

「今日のおすすめは鯖で決まりだな」

ミチヤが持ち重りのする鯖の包みを差し出した。美音は返事もそこそこに、駆け出さんばかりの勢いで『ぼったくり』に向かう。

「あんまり慌てると転ぶぞー！」

そんな笑い声まじりの台詞^{せりふ}が、美音の背中を追いかけてきた。

「^{かおる}馨、見て見て！ 今日^{けふ}の鯖はすごいわよー！」

美音は店の引き戸を開けるなり、大声を上げて妹の馨の注意を引く。

「いい鯖があったんだ。秋も盛り^{さか}だねー。にしても、そんなに喜ばなくても」

毎年同じやり取りをしている馨は、美音よりずっと冷めている。その温度差が、美音は微妙に面白くない。もう少し盛り上がってくれてもいいのに、と思っつまう。

「だって鯖よ、秋鯖！ しかもこんなに新しくて、脂がのってるのよ！」

「はいはい、わかりました。大急ぎで塩で締めるんでしょ？」

「そのとおり。上の棚からいつものバットを出して」

「了解」

答えるなり、馨はついつと手を伸ばし、天井近くの棚からステンレス製のバットを取り出す。

なんでこの鯖のすごさがわからないのかしら……とぶつぶつ言いながら、美音はミチヤが三枚に下ろしてくれた鯖にびっしりと塩を振る。丁寧に骨まで抜いてくれているのが嬉しかった。

今は魚離れ対策とやらで、スーパーでも三枚に下ろすぐらいはしてくる。『スーパー呉竹』でも頼めば断られることなどないはずだ。けれど、こんなに丁寧骨を抜いてくれることはない。それはやはり町の魚屋ならではのサービスだと美音は思う。

美音だって料理人の端くれ、本マグロならいざ知らず、鯖さばぐらいの大きさの魚なら捌さばける。けれど、魚のプロが処理してくれるのならそのほうがいいに決まっていた。

鯖を入れたバットを冷蔵庫にしまい、美音はほっと一息ついた。エプロンの下に違和感を覚えて確かめると、財布や鍵を入れた小さなポシェットが、斜めがけのままになっている。これを外す間も惜しんで鯖の下拵したじろえを始めたのか……と自分でもおかしくなった。

『ぼったくり』を開いた父は、鯖を仕入れるたびに『鯖の生き腐れ』という言葉を口にし、時計の針と追いかけてくをするように料理していた。美音は居酒屋店主として必要なあれこれを、すべて父親から教えられたけれど、こんなところま

で受け継ぐとは思ってもしなかった。

そんな美音の思いを見透みすかしたように、馨が言う。

「ほんと、お姉ちゃんってお父さんそっくり。で、残りの鯖はどうするの?」

そう言いつつも、馨はフライパンに油を入れている。彼女の中では、残りの鯖の料理方法は既に決まっているのだらう。

「とかなんとか言っちゃって。あれを作りたいから油を用意してるんでしょ?」

「ばれたか……」

馨は片栗粉を取り出しながら、少々ばつが悪そうに笑った。

十

「早紀ちゃん、早いね」

その後、仕込みを終えた美音は、外の掃除をしまおうと引き戸から出た。そこに通рикаかったのは、『ぼったくり』の裏にあるアパートに住んでいる早

紀だった。まるで、去年の夏、スーパーで鰻^{うなぎ}を見ていたときのような難しい顔をしている。中学校の制服を着ていないところを見ると、一度帰宅してからどこかに出かけてきたのだろう。

「あ、美音さん、こんにちは」

丑^{うし}の日の孝行娘は相変わらずの親孝行ぶりで、あの鰻のちらし寿司を作ったあと、時々美音に簡単なレシピを教わりにきたり、休みの日に『スーパー呉竹』などで会ったときに旬を迎えた食材や、その選び方を訊いたりしてきた。

料理の腕もどんどん上達しているようで、たまに顔を合わせる彼女の両親から美音は随分感謝されている。

「どうしたの？ 難しい顔して……。また何か問題でも？」

「そうじゃないんですけど……。あ、でも、やっぱり問題かも……」

そう言うのと、早紀は困ったように手提げ袋に目をやった。

以前、近くの公園からこんな風に袋を提げて、思案顔で戻ってきたお客様がいたな……と思い出した美音は、つい訊いてしまった。

「なに？ まさか、ネコでも拾ったとか？」

「ネコなら嬉しいぐらいです。うちでは飼えませんが」

「そっか……。じゃあ？」

おそろおそろの手提げ袋を覗き込む美音を笑いながら、早紀が取り出したのは一冊の本だった。

「なんだ、本なの。あらでも、それ……」

それは、魔法使いの少年の冒険をモチーフにし、映画化もされた大ベストセラー小説のシリーズ最新刊だった。大人でも十分楽しめる作品のため、美音姉妹も大のお気に入り。つい最近も統編刊行にあたって、放送されたのをきっかけに、復習がてら既刊を読み返したばかりだ。

だが、その本がいったいどうしたというのだろう。蔵書シールが貼ってあるから図書館で借りたものだろうけれど、それ以外に変わったところは見られない。そもそも読みたい本が手に入らないならまだしも、すでに手にしているのだから困ることなんてないはずなのに……と美音は首を傾げた。

そのとき、早紀が困り果てたような声で言った。

「この本、すぐく読みたかったんです。でも私には高くて買えないから、図書館で予約して、ずーっと待って、やっと順番が回ってきたんですよ」

自分も弟の直也なおやもこのシリーズが大好きで、映画のほうも映画館では無理だけど、テレビで放送されるときは欠かさず見ている。もちろん、これまで出版された本も全部借りて読んだ。完結したときはがっかりしたけど、続きが出ると聞いてすごく嬉しかった。順番がくるのをずっとずっと楽しみにしてきて、連絡が来るなり図書館に駆けつけた。

それなのに……と、早紀は哀しそうに言う。

「くさいんです」

「え……くさい？」

怪訝けげんな顔になった美音に、早紀は黙ってその本を差し出した。

「あ……ほんと、これはひどいわ……」

受け取ってページを開く前に、たばこの臭いにおが鼻にまとわりついてきた。

ヘビースモーカーが狭い部屋で立て続けにたばこを吸ったときに染みつく臭い。それが、本全体に絡みついていた。

「今すぐにでも読みたいんです。でも、この臭いのせいで読む楽しみが半減しそう。それにこれを家に持って帰ったら家までたばこくさくなりそうな気がして。直也も楽しみにしてるのに……」

美音には早紀の気持ちがとてもよくわかった。

実は美音も、たばこという嗜好品しこうひんにはあまり魅力を感じていない。

愛煙家の人から、一種の癒し効果いやしこうかがあると聞いたことはあるが、やはりニコチンやタールが与える身体への影響、わけでも味蕾みらいへの影響が気になった。

味覚をつかさどる器官である味蕾は、ただでさえ年齢とともに衰えおとしろると言われている。

料理を商う人間あきなとしては、味覚の衰えをニコチンやタールによって助長させるわけにはいかなかった。

それでも、居酒屋という商売上、店内全面禁煙にするにはかなり勇気がある。

一説によると、酒を呑むとたばこを吸いたくなる人もいるらしい。禁煙席を設けられるような店の造りではないこともあって、父の代から『ぼったくり』ではたばこは不問に付す、ということになっていた。

とはいえ『ぼったくり』の常連には、チェーンスマーカーはひとりもいなかったし、たまに来る愛煙家の客も、店内では喫煙を控えてくれる人がほとんどである。たばこで間を持たせるよりも酒と料理に集中して楽しみたい、と誰もが言ってくれるのは、本当にありがたいことだと美音は感謝していた。

早紀は依然として眉間に深い皺しわを寄せて嘆く。

「図書館の本にこんな臭いにおを付けて返すなんてひどい……」

「自分ではなかなか気がつかないものらしいわよ。でも、身近にたばこを吸う人がいない人間にとっては、ものすごく気になるよね……」

日常的にたばこに縁がない人間がたばこの煙に接すると、そうではない人間の何倍も鋭敏にその臭いを感じ取るし、嫌な思いもある。

早紀の両親はたばこを吸わないから、家の中にたばこの臭いを放つ本があるな

んて耐え難いがたはずだ。弟の直也にしたって、この臭いは嫌に決まっている。

「あーあ……魔法でこの臭いを消しちゃえないかなあ……」

諦めきれない顔で早紀は言う。どれだけたばこくさくても、この本は読みたい。だから我慢して持つて帰るしかない、と……

美音は、引き戸から店の中に首を突っ込み、壁に掛かっている時計を見た。

開店までには、まだ三十分ぐらい時間がある。これなら大丈夫、と確認したあと、中で掃除をしていた馨に声をかけた。

「馨、ちょっと家に戻ってくるね」

「え、なに？ 忘れ物？ お姉ちゃんにしては珍しいね」

「違うわよ。本を取りに行こうと思つて」

「本？」

何事かと出てきた馨は、早紀が持っている本に目をやり、続いてその臭いに気がついた。

「うわ……すごいね、この臭い」

「でしょ？ これを読むのはちょっと辛そうだから、貸してあげようと思って。ねえ、早紀ちゃん、これと同じ本、うちにもあるんだ。それを貸してあげるから、その本は図書館に返しちゃうたらどうかしら？」

「え……でも、そんなのご迷惑じゃ……」

お店の準備だってあるのに……と、困った顔になった早紀に、美音はひときわ明るい声で返す。

「平気、仕込みはほとんど終わってるし、残りは馨に任せるから。馨、自転車を貸してね」

ところが、そう言っただけで店の裏に回ろうとした美音を、馨が呼び止めた。

「ちょっと待って、お姉ちゃん。あたしが行く」

「あら、そう……？」

「あたしのほうがずっと早いよ！ なんてったって、若いし！」

「一言多い！ っていうか、あんた、お店の準備したくないだけじゃないの？」

文句を言う美音にお構いなしに、馨は愛車にまたがって、颯爽と走り去った。

ため息満載で見送ったあと、美音は早紀を振り返った。

「ということ、図書館に行ったらつしやい。できれば図書館の人に、臭いが付いてるって伝えてみて。もしかしたら臭いを消す方法があるかもしれないし」

「わかりました！ 行ってきます」

そして、早紀は、図書館への道を猛ダッシュで引き返していった。

「お待たせー！」

馨はすごい勢いで自転車を飛ばしたらしく、予想よりずっと早く、そして、ずっと大荷物で戻ってきた。

これまた猛スピードで図書館から戻り、店の前で背伸びせんばかりに馨の帰りを待っていた早紀は、手渡された紙袋の重さにびっくり仰天である。

「うわあ、馨さん……これって……」

「うん。ぜんぶ持ってきたよ。最新刊読んだら、絶対また最初から読みたくなるから」

えっへん、とばかりに馨が言った。美音も馨もそうだったから、早紀もきつと同じだと見越したのだろう。

「ありがとうございます!!」

早紀の眉間の皺はきれいさっぱり消え失せた。大好きなシリーズが全巻揃って目の前にあることを、飛び上がらんばかりに喜んでいる。

「ゆーっくり読んでいいからね。あたしたちはもう、覚えちゃうぐらい読んじゃったし。あ、もちろん直也くんにも読んでもらってね」

「馨さん、ありがとうございます!」

早紀の輝くような笑顔を見て、馨もとても嬉しそうだった。

「馨、グッジョブ!」

「普通だよ、普通」

照れ隠しのように言うと、馨は自転車を裏に置きに行った。

「美音さんありがとうございます。私、本当にこの本が大好きで……」

「うん、わかるわかる。すっごく面白いものね。早く帰って読んだら?」

お礼なんていいから、と美音は早紀を急かす。きつと直也も、早紀の帰りを待っているだろう。

「はい!」

そして早紀は、さつき図書館に駆けていったとき以上の勢いで、裏のアパートに戻っていった。

+

その夜、美音は、カウンターに座ったマサに早紀の一件を話し、小さくため息をついた。マサは植木職人で、『ぼったくり』の常連のひとりである。

「嗜好品ですから、好きな方は吸われればいいとは思うんですけど……」

マサはいつもの『朝日山 百寿盃』を、秋らしく温めの燗で呑みながら相槌を打つ。

目の前に出されているのは、少し血の色を残すぐらいに仕上げられた、しめ鯖。

酢に搾り込んだ酢橘すだちがほのかに香っていた。

新鮮な鯖さばだからこそできるレア仕上げの一切れに、マサはわさび醬油じょうゆをちょつとつけて口に入れる。鯖のまったりとした脂あぶらが合わせ酢に助けられ、得も言われぬさっぱり感を呼ぶ。旬ならではの味をしばし噛みしめたあと、マサは言葉を返してきた。

「とはいえ、時と場所を選ぶ必要はあるよな……」

「そうですね……ご自分が吸われるのは自由ですけど、その結果、図書館の本にまで臭においが染みついちゃうっていうのは困りものですね」

「でもよー、多分、気がついてないんじゃないかねえの？　どんだけ自分の家がたばこくさいかなんて」

「やっぱりそうなんでしょうか？」

「そうに決まってるさ。吸わねえ人間は気になるけどな。たばこを吸ってる奴ってけっこうわかるじゃないか。なんとなく服とかからも臭うし、どうかすると手帳とかも……。紙ってわりと臭いを吸うんだよな」

「あ、それわかります。現場で渡された図面がたばこくさいってこともありますからね」

そこに口を挟んできたのはアキラだった。アキラは家電製品の取り付け工事を請け負っている関係で、引き渡し前の新築マンションにエアコンを取り付けに行ったりもする。

現場監督が愛煙家で車の中でもたばこを吸うらしく、打ち合わせに持ってくる図面からたばこの臭いがする、と困ったように言う。

「吸う場所がないから車の中で、って気持ちにはわからないでもないんだけど、こっちは慣れないからつい気になっちゃって」

「やっぱりなあ……今は、建物の中も路上も禁煙マークばかりになってるから、たばこを吸う奴は小さくなって車の中でぷかり……ぐらいしかやりようがねえもんな」

気の毒といえば気の毒だ、とマサは同情を示した。

「でも、図書館の本は公共のものだろ？　特に、今の話に出てきた本なんて、子

どもに大人気のやつじゃないか。たばこの臭いとか付いてて大丈夫なのかな……」
 アキラは、身体に影響とかないのかな……と首を傾げている。そう言いたくなるほど『臭い付きの図面』に出くわす機会が多いのかもしれない。

確かに美音も、身体への影響は気になる。

大人にも子どもにも人気が高い本だけに、早紀の前にあの本を借りた人は、紫煙をくゆらせながら読書を楽しんだのかもしれない。美音自身、今日ほどひどくないにしても、図書館で借りた本にたばこの臭いを感じたことは一度や二度ではなかった。早紀は頻繁に図書館を利用しているし、他にも図書館の本を借りて読む子どもは多いだろう。臭いだけでも身体に悪影響があるのかどうかは、気になるところだった。

「一度、シンゾウさんか太田先生おおたに訊いてみますね。どっちにしても、消臭剤で臭いは取れるかもしれませんが、それはそれで本も傷いたむでしょうし、最初から臭いをつけないにこしたことはありませんよね」

公共の物は大事にしろ、って当たり前のことなんだけど、破ったり、汚したり

以外に臭いにも気をつけないとな……とアキラがため息をついた。

「それで思い出したんだけど……」

そこで口を開いたのは、それまで黙って話を聞いていた馨だった。

「たばこっていえばさ、一時期、ホタル族はやって流行はやったじゃない？」

「ああ、あのベランダでたばこ吸う親爺おやじさんたちかい？」

その流行は『二時期』なのか？ 今でもやってる奴はやってるぜ、とマサは笑う。

馨は、あ、そうか、現在進行形か……と訂正しながらも話を続ける。

「あれも考えものよね」

なにが考えものなのだろう。家の中にいる家族にたばこの影響を与えないように外で吸うというのは、いい配慮に思えるけど……と美音は思った。そんな美音の目の前で、人差し指を左右に揺らしつつ馨は言う。

「あれさ、自分の家族にはいいけど、隣の家のこととか考えてないと思わない？」

窓を開けっ放しにしているときに、隣のベランダでたばこを吸われたら、煙が窓から自分の家に流れ込んできてしまう。家の中、換気扇の下でたばこを吸う人

もいるらしいが、排気口が自分の家の窓に面していると、煙が全部入ってきかねない。

それが嫌で、隣でたばこに火をつける気配を感じると、真夏でも窓を閉めざるをえない。そんなこんなで、自分の家族さえ煙害から守れば隣人はどうでもいいのか、と、トラブルの種にもなっているらしい。

「はー、なるほどねえ……」

「たばこを吸うのはご自由に、でも煙を吐かないでください、つて言う人もいるらしいよ」

「それはまた……」

その場にいたみんなが絶句した。それこそ、気持ちにはわからないでもないが、あまりにもできない相談すぎる、という感じだった。

「それはさすがに吸ってる奴が気の毒だなあ……。別にご禁制の品でもなんでもないのに、そこまで言われちゃうなんて」

そう言ったあと、マサは、別に俺は吸わねえからいいけどな、と付け足した。

美音はちよつと考えながら答える。

「たばこから入ってくる税金とかも、かなりの金額だって聞いたことがありますけど……」

「確かにそうらしいけど、それとたばこが原因で病気になった人の医療費とどっちが大きいかわからないの？」

医療費がかかれば、そこに投入される保険料も大きくなるから税金だってたくさん使う、と馨が訳知り顔に言った。

新聞か何かで読んだことの受け売りかと思ったら、どうやら学生時代、彼氏の哲が喫煙に興味を示したことがあったらしい。馨は、なんとかそれをやめさせようとしてあれこれ調べて、説得に励んだという。

『吸い始めるのは簡単だけど、やめるのは大変なんだよ』という言葉が決定打となって、説得は大成功、哲が愛煙家の道を歩むことはなかったそうだ。馨は哲の健康に大いに貢献したことになる。

「ほう。そいつはいいことしたな、馨ちゃん」

「でしょ？ たばこなんて百害あって一利なしだよ」

馨とマサは意気投合している。だが、美音は、話はそう簡単ではないと思う。病気になる人が多ければ国が負担する医療保険料も増えるのは当然だが、喫煙者を減らして医療費を削減するほうがいいのか、たばこ税を維持して財源を確保したほうがいいのか、結論を出すのは難しいはずだ。

純粹に健康のことだけを考えたとしても、ずっとたばこを吸ってきた人が禁煙を強いられたときに感じるストレスは馬鹿にならないと聞く。ストレスから病気になることだって、ないとは言いいきれない。老い先短いんだからたばこぐらい吸わせろ、なんて言う年寄りも少なくないだろう。

「まあ、うちの常連さんは吸わない人が多いからいいですけど、家族に吸う人がいたらいろいろな意味で心配でしょうね」

本人の健康、家族の健康、周囲への配慮……どれをとっても、吸わないほうがいいという結論に落ち着きかねない。そんな中で、たばこを吸い続ける家族がいたら、対応に迷うことだろう。

「家にたばこを吸う大人がいれば、子どもにとってもたばこは当たり前ものになっちまう。で、そのうち自分も吸い始めて、代々ずーっとそれが続いていくんだろうな」

少なくとも、家族みんなが喫煙者なら、家の中で嫌煙^{うんぬん}云々の問題は生まれないだろう、とマサは言う。

「でも、問題はそればかりじゃないんだよ！」

馨がことさら鼻息を荒くした。

「誤飲^{ごいん}とか、ライター^{ライター}の火遊びとか、たばこがらみの子どもの事故だってあるじゃない!? それって、そもそも家にたばこを吸う人がいなければ起きない事故だよね？」

赤ん坊が灰皿に残っていたたばこの吸い殻を口に突っ込む。火のついたたばこに触ろうとして火傷^{やけど}をする、といった事故はあとを絶たない。

子どもがライターをいじって怪我をしたとか、火事になったという事故も一時期相次いだ。使い捨てライターについては、子どもが簡単に着火できないように

改良されたようだが、古いタイプが払底したわけではない。使い捨て以外のライターを使っている人も多いだろう。そもそもライター、あるいはマッチなど『火がつくもの』は子どもの興味を引きやすく、目の前にあれば触ってみたくなるのも無理はないのだ。

「子どもがいるときは、たばこは控える。吸うにしても、たばこやライター、吸い殻の始末はきちんとしなきゃ」

「だがなあ……たばこを吸う連中は、気晴らしにばあーつとふかしたいだろうに、いちいち後始末まで考えてって言われるのも辛かるうよ……」

「馨だって、ダイエットしてる人から、あたしの目の前でおやつなんて食べないで、お菓子は全部見えないところにきっちりしまつて！ とか言われたら面倒くさいと思わない？」

「お姉ちゃん、それ、話が違いすぎ……」

お菓子はダイエットの敵だけど、別に周囲の人の身体に害があるわけじゃない、と馨は唇を尖らせる。

「あら、そう？ ダイエットの例を出せばわかりやすいかなーと思つて」

「違いねえ」

姉妹のやりとりひとしきり笑ったあと、一連のたばこにまつわる話題を打ちきるように、マサが言った。

「ま、いずれにしても、たばこをふかす男がかっこいいと言われた時代は終わつたってことだな」

かつて、職人にキセルやたばこはつきものとされた時代もあった。だが、今現在、植木職人であるマサはたばこを吸わないし、彼のまわりでも喫煙者はどんどん減っているらしい。

ちよつと影のある男、あるいは粹いきな職人がたばこをふかす風景というのはいま映画や絵画、写真の中で見られない時代なのかもしれない。

健康もまわりへの配慮も大事だけど、それはそれでちよつと淋しい。そう思いつつ、いったい自分はどっちの味方なんだ、と首を傾げそうになる美音だった。

「鯖^{さば}か……随分と下世話なものを出す」

カウンターに座った客が吐き捨てるように言った。

これまで『ぼったくり』で鯖を、いや、他のどんな食材だってそんな風に貶める客はひとりもいなかった。それなのに、初めてやってきたその男は『本日のおすすめ』に書かれた文字を見ただけでその台詞^{せりふ}を吐いたのである。

馨の表情が不快げなものに変わった。そんな妹を目で叱り、美音はあえて静かに言葉を返す。

「そうですね。うちは高級料理店ではありませんから、扱っているのは下世話なものが多いかもしれません。でも、できるだけ美味しいものを、できるだけお値打ち価格で召し上がっていただきたいと思っっているんですよ」

「ものは言いようだな」

男はあくまでもけんか腰だった。美音は男の様子をそつと窺^{うかが}う。

歳はおそらく五十代後半、仕事帰りに間違いないだろう。仕立ての良いスーツから疲れが染み出しているように見える。ネクタイがきちんと締められているところを見ると、接客業、あるいは営業回りの仕事にでも就いているのだろうか。もしかしたら、仕事で何か嫌なことがあったのかもしれない。憂^{うれ}さを晴らしたいけれど、馴染^{なじ}みの店ではためらわれる。通りすがりの、入ったことのない店ならかまいはしない、と考えた可能性は否めなかった。

血氣^{さか}盛んという年頃でもない。なにがこの客をこんなに不機嫌にさせたのだろう……、美音は男の姿を見ながら、そんなことを考えた。

「お飲み物はなににいたしましたしょう?」

姉の声を聞きながら、馨は品書きを男の前にそつと置いた。男は、カウンターの上に並んでいる焼酎^{しょうちゅう}やウイスキーの瓶^{びん}を一瞥^{いちべつ}して答える。

「どうせ下世話なものしか置いてないに決まってる。ビールでいい」

聞いたとたん、馨は頭に血^{のほ}が上るのを感じた。

姉はいつもと変わらぬ笑顔で新参の客とやりとりしているし、先ほどは心情がそのまま顔に出てしまった自分を窘めさえた。接客のプロとしてそうあるべきだとわかっていても、悔しさが抑えきれない。

あえて輸入ビールを出すという手段もある。このあたりの店では滅多に見ないドイツビールでも出して、鼻をあかしてやればいい。姉なら、きっとそうするだろう……

そんな思いで、馨は美音の手元を窺った。けれど、姉が出したのは、どの店でも扱っている国産の瓶ビールだった。

男の鼻の穴が、ちよつと広がった。さらなる批判材料を得た、というところだろうか。

「ありきたりだな」

「申し訳ありません。この銘柄をお好みのお客さまも多いですし、料理にも合わせやすいものですから」

「下世話な料理にありきたりな酒、まったくなつちやいなな」

「おっしゃるとおりです」

なにを言われても、美音の控えめな笑顔は崩れない。

霜が^{しも}つくほど冷えたグラスを男に渡し、慣れた仕草でビールを注ぐ。きれいに立った泡に一瞬だけ目を留めたあと、男はビールを一息に呑み干した。

喉が渴いていたという風にも見えないのに……と馨はさらに疑問を感じる。なぜこの男がこの店にやってきて、ここまで不満をまき散らしているのか、謎としか言いようがなかった。

男の視線が、目の前に置かれている醤油や塩の容器、つまようじ立てなどをさまよう。やがて、ちつ……という小さな舌打ちが聞こえてきた。

「今日で何日目ですか？」

何気なく、姉が訊ねた。

男のほうを見るでもなく、鍋の中の調味料が煮立つ様子に目をやったまま発せられた問いに、男は飛び上がらんばかりになった。

「な、なんだよ、なにがだよ！」

そこで初めて、美音が男と視線を合わせた。
「口が寂しくなる時期じゃないんですか？ 文句もたくさん言いたくなっちゃいますよね」

男は一瞬絶句し、数秒の沈黙のあと、なぜか諦めたような口調で答えた。

「……そりゃあ、まあ……」

「お辛いですね……」

「ああ……」

馨には、美音がなんの話をしているのか全くわからなかった。男は呆然と美音の顔を見たあと、それ以後は文句をまき散らすこともなく、ただ黙ってグラスを口に運んだ。またぐいぐいと呑み干し、手酌でビールを注ぎ足す。それで瓶は空になった。

馨は男の表情を窺った。呑み足りないみたい、お代わりを運んだほうがいいかな、と迷っていると、再び美音の声があった。

「鯖さばのオランダ煮でも召し上がりませんか？ 今日の鯖は、すごく脂あぶらがのつてて

おすすめなんですよ。もしかしたら、お酒はそこまでにして、お食事にされたほうがいいかもしれません。ご飯とお味噌汁もご用意できます」

ご飯は新米の炊きたてですよ、と美音はにつこり微笑む。男は空っぽのビール瓶と、美音の手元の鍋を交互に見たあと、呟くように、そうするかな……と答えた。
「馨、こちらさまにお味噌汁をご用意して。赤だしがいいわ」

馨に言いつけたあと、美音は、予め片栗粉をまぶして揚げてあった鯖を鍋の煮汁に入れた。煮汁の中には薄切りにされた生姜しょうががたっぷり。普段よりもみりんと砂糖を多めに使っているから、甘みが勝った、こってりした煮物が出来上がるはずだ。

美音が鯖を煮ている間に、馨は豆腐とナメコの赤だしを温め、小ネギを散らす。やがて茶碗に盛り付けられたご飯と鯖のオランダ煮、熱々の味噌汁が、男の前に並べられた。

それまで仏頂面ぶつぽうめんでビールを呑んでいた男が、目の前に食事を置かれた瞬間、ごくりと生唾を呑み、さっと箸を取り上げた。

男は、オランダ煮の甘い醬油^{しょうゆ}と生姜^{しょうが}の味を噛みしめ、煮汁でとろけた衣の食感を楽しんでる。続いて炊きたての新米。米はほんのりと甘く、合間に口に運ぶ味噌汁は八丁味噌仕立てで、ナメコのぬるりとした食感が舌に心地よいはずだ。味噌汁の熱さも含めて、文句のつけようもない……という顔になる。

すべての器がきれいに空になった。運ばれた焙じ茶^{ほうじ}を一口飲んだあと、男は恥じ入ったような顔で、美音に詫びた。

「すまなかった……。完全に八つ当たりだ」

八つ当たりってどういうこと？ と首を傾げた馨をよそに、美音は認知り顔に頷いた。

「いいんですよ。お氣になさなくても。大変なんですってね……たばこをやめるって」

「そうなんだ。口寂しいし、いらいらするし、それでつい……。それにしても、禁煙中だつてよくわかったな……」

「何度も、胸のポケットに手をやられたでしょ？ いつもそこにたばこを入れて

らつしやるんじゃないかな、と思つて。それに、灰皿を見てすごく嫌な顔をなさいましたし」

「目ざといな」

「それから、ほんの少しはこの香りがします。まだ禁煙されてから間もないんじゃないですか？ だから、家の中にたばこの香りが残つて、服とかにも……」
そんな風に、次々に推理の根拠を明かす美音を感じたように見たあと、男はさらに質問を重ねた。

「じゃあ、赤だしは……？」

「言葉のアクセントに少し愛知の言葉が入ってるような気がして……。違いましたか？」

「いや、正解。出身は名古屋なんだ。こっちに来て長いから、すっかり抜けたと思つてたんだが」

気持ちさがさくれ立っていたのに、赤だしを飲んだら落ち着いた、と男ははにかんだような笑顔まで見せる。

——お姉ちゃん、すごい……

馨は今更ながら姉の対応に恐れ入る。

禁煙を始めたばかりの人は、とにかく不機嫌であらゆるものに文句を言いたくなるらしい。

その文句をあえて抑え込まず、好きに言わせて、さらにたばこを吸いたくなるアルコールではなく満腹を誘う食事を勧めた。

食後の一服を欲しがる人もいるけれど、それでもアルコールとたばこという組み合わせよりも耐えやすいのかもしれない。現に、男は食事をしてたくさん嘔むことで、たばこを吸えない口寂しさを紛らわせたようだ。

「にしても、そうか……まだ臭い^{にお}がするんだな。実はやめて三日目なんだ」

「三日目……一番辛い時期じゃないんですか？　ここを乗り切れるかどうかが分かれます、って聞いたことがある気がします」

それじゃあ、文句も言いたくなるし、不機嫌になるのも当然です、と美音に言われて男の表情がさらに柔らくなかった。満腹になって少し気持ちが落ち着いた

せいもあるのかもしれない。それに、男にとって懐かしくて堪^たまらないだろう赤だしの味噌汁が、頑^{かた}なになっていた気持ちを解きほぐすのに一役買ったに違いない。「何年ぐらい吸われてたんですか？」

「三十年以上かな……。ここだけの話、成人前から吸ってたから……」

「あら……。それでよくおやめになろうと思われましたね」
小さく目を見張った美音に、男は恥ずかしそうに答えた。

「実は、同居している息子夫婦に近々子どもが生まれるんだ」

「ああ、それで、奥様がやめてくださいって……？」

孫が生まれると聞いただけで、美音は全ての経緯を察したらしい。

男がほっとしたような顔になった。細かい説明をくどくどしなくてすんで助かった、とも思っているのだろう。

「そう。たばこの煙は赤ん坊によくない、って鬼説教」

「お孫さん思いのいいお祖父さま、お祖母さまですね」

「孫になんかあっちゃ大変だからな。息子には、『俺たちが子どものときは「た

ばこは俺の楽しみだ。やめるなんてとんでもない」って言つたくせに！」って文句を言われちまったけど」

「時代も違いますからね……」

父が生きていればこの男ぐらいの年齢になっているだろう。だから、この男の息子はおそらく姉と同年代、その子どものころといえ、今から二、三十年ぐらい前ではないか。

そのころは、たばこの害について今ほど研究もされていなかったし、喫煙率だつてずっと高かった。すべてを『たばこぐらい……』の一言で済ませてきたに違いない。

けれど、今はたばこの害についてはっきりわかっているし、世間でもうるさく言われている。かわいい孫のためにやめてください、と妻に詰め寄られたら反論できないだろう。

「身体に悪いのはわかっているし、この機会にやめようと思ったんだけど、どうにも耐えられなくて……。家にいたらいで、家族に当たり散らしそうだしな」

通りすがりで目についたこの店に入った。一見客の気楽さで、暴言を吐いてしまった。そうやって二度と来なければいいとばかりに……

大人げないことをして申し訳なかった、と男はまた頭を下げた。

男の、家族やこれから生まれる孫を思う気持ちに打たれ、馨はそれまで向けていた冷たい視線を即座にしまい込んだ。空になっていた湯飲みに焙じ茶を注ぎ足しながら、男に話しかける。

「病院には行ってみましたか？」

禁煙を試みる人のための禁煙外来というものがあることは、このところ随分知られてきている。

禁煙できないというのはニコチン依存症に罹っているせいなのだから、それから脱するために医療の力を借りることはおかしいことではない。むしろ、医師の手を借りて、無理なく禁煙を目指すべきだと言われている。

男は注ぎ足された湯飲みを持ち上げ馨に小さく頭を下げたあと、ため息まじりに答えた。

「病院か……。実はそれも調べてみたんだけど、なんせ予約がいっぱいで、診てもらえるのは二ヶ月も先になるらしい。それじゃあ孫が生まれるのに間に合わない。待ってられないと思って自己流で始めてみたんだ」

「ああ、そういえばどこもいっぱいだって聞きますね。自己流じゃあますます大変でしょう?」

「家族はもともと俺のたばこをよく思ってたから、多少苦勞するのは当然だ、みたいに言われちゃってさ」

「それはさらに辛いですね」

そこで男は、うん……と小さく頷き、それでもきっぱりと言い切る。

「でも、生まれてくる赤ん坊のためにも絶対やめたいんだ」

「大丈夫ですよ、その意志があればきっとやめられます」

「そうかな」

「そうですよ。今はいいサプリメントも出てるみたいだし、そっちも調べてみたらどうですか?」

禁煙サプリっていうらしいですよ、という馨の言葉に、男は思い当たったらしい。

「禁煙サプリか……聞いたことあるな」

「けっこう効果があるって評判ですから、是非調べてみてください」

「ああ、ありがとう」

美音と馨に励まされて、男は自分に言い聞かせるように、絶対やめる、やめてみせる、と呟いた。

「だれかに当たり散らしたくなったら、うちに寄ってください」

美音が、なんでもない風で男に言った。

「うちは居酒屋ですから、お客さんの愚痴や文句には慣れています。家に帰ってご家族に当たり散らすよりも、うちで吐き出していただくさい」

男の目が点になった。だめ押しのように、馨も付け加える。

「一回波が来て、やりすごしたら、しばらくは大丈夫って聞きます。ここではーつと吐き出してから家に帰って、ちょっと奥さんと話とかして、あとは布団被って寝ちゃえばいいんですよ」

いかにもな口調で言っではみたが、実は単なる聞きかじり、それが本当かどうかは馨にはわからない。だが、男がうんうんと頷いたところを見ると『吸いたい波』というのはいりあるのだろう。

「じゃあお言葉に甘えて」

「いつでも。下世話なものしか出ませんけど」

「馨！」

つい皮肉が出て、姉の叱責が飛んできた。

だが、馨が無礼を詫げるよりも先に、男が頭を下げた。

「それもすまなかった。言いがかりもいいところだ。本当は俺、鯖は大好きなんだ。オランダ煮も赤だしもすごく旨かった」



そう言っつて男は笑う。屈託のない笑顔に、馨はほっと胸をなで下ろした。

「たばこをやめると、舌の感覚が戻るそうですよ。食べるものがすごく美味しくなるって。だから、いろいろなものがもと美味しく感じられるようになるかもしれない」

「ああ、それはいいな。励みになる」

「だから、頑張ってくださいね」

「ありがとう」

そして男は、また寄らせてもらおうよ……と帰っていった。

十

「たばこか……」

いつもどおりに遅い時刻に現れた客——要は、一瞬、目を宙に泳がせたあと後ろめたような顔になった。

その様子にぴんときて、美音は要をじつと見つめる。

「もしかして、吸ってたことがあるんですか？」

「吸ってたっていうか……昔、一度だけ、吸ったことがある」

「昔？ 要さん、それって、もしかしたら未成年のときだったんじゃない……」

今現在、要が喫煙者でないことはわかっている。

彼のどこからまたはこの臭い^{にお}なんてしないし、母親と住む家にも、学生時代暮らしていたというマンションの部屋にもたばこの気配はなかった。こんな顔をするのは、違法行為に手を染めたという自覚があるからに違いない。

美音の疑わしそうな眼差しに、要はあつさり頷いた。

「高校……あれは確か、二年生ぐらいのときだったかな」

「吸っちゃったんですか？」

「うん……まあ……」

「わあ……要さんって、不良だったんですね」

「そう言うなよ。一度だけだ。しかも、一本をまともに吸いきることすらできな

かったんだから」

そして、要はやましき満載の表情のまま、たった一回きりの喫煙経験について語り始めた。

「親父がたばこを吸う人でさ、家に買い置きのカートンがあったんだ」

コンビニや自販機でたばこを買うのはハードルが高いが、家にあるなら話は別だ。これ幸いと一箱くすねて、両親の留守を狙って火をつけてみた。

自分の部屋だと臭いではれるから、わざわざ父親の書斎に潜り込んで……と要は思い出し笑いをしながら言った。

「ちゃんと吸えましたか？ 初めてのときって、吸い方がわからないんじゃないですか？」

どこかで、初めてのときは上手く火をつけることさえできない、と聞いたことがあった。ところが要はそのあたりは学習済みで臨んだらしい。

「悪友の経験談とか聞いてたからね。火はちゃんとした。ただ、学習しすぎて、

初心者のかせに上級者みたいなことやっちゃった」
「っていうと？」

「思いっきり肺に吸い込んだじゃったんだ。ひどい目に遭^あったよ。気持ち悪くなるし、頭はくらくらするし……もう二度とごめんだって思った」

自分には無理だと判断し、さっさと火を消した。吸い殻は父親の灰皿に紛れ込ませてまんまと隠^{いんべい}蔽したものの、残ったたばこの処分に困った。

「なるほど……一本だけしか吸ってないんですものね。で、どうしたんですか？」

「毎日、一本ずつ親父のたばこケースに戻した」

「ええっ!？」

封が開いているたばこをカートンに戻すわけにはいかない。かといって、そこに放置もできない。自分の部屋なんでもつてのほかだ。処分に困った要は、父親の留守を見計らって書斎に潜^{もぐ}り込み、机の上に置いてあるたばこのケースに戻した。一度にたくさん戻すと気付かれる、ということで一日に一本ずつ……

「か、要さん……それってあまりにも……」

「馬鹿だって言いたいんだろう？ そのとおり、いくら悪ぶっても根は真面目だったんだよ、おれは」

「どうして、外に持っていて捨てなかったんですか？ 駅とか、コンビニとか、捨てる場所はいくらでもあるじゃないですか。そのほうがよっぽど簡単だったでしょうに……」

「だよな。今ならそう思う。我ながら情けないよ。知恵が回らないというか、なんというか……」

そう言うなり、要はがっくりとうなだれた。

そんな要とは裏腹に、美音はこぼれる笑みを止められない。

笑い続けている美音を見て、要が不満そうな声を上げた。

「そこまで笑わなくても……」

「ごめんなさい。忍び足でお父様の書斎に潜り込む要さんを想像したらおかしくて……」

「まあ、そうだろうな。でまあ、それで懲^こりた。それっきり、たばこにだけは手